



2050年カーボンマイナスを実現します

九電グループが100年以上育て、守り続けている社有林 (大分県由布市)

ひとりひとりが、できることを

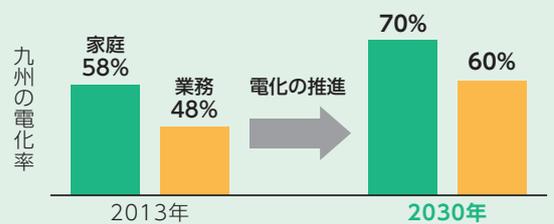
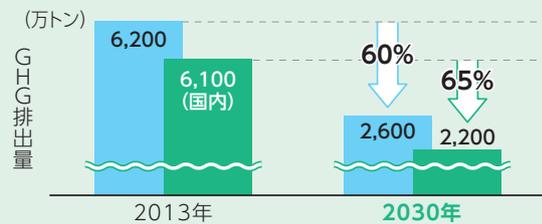
地球温暖化の防止に向けて、その原因とされるCO₂等の温室効果ガス (GHG) の排出量削減に取り組む必要があります。そのためには、エネルギーを作る人 (供給側) と使う人 (需要側) の双方で、取組みを進めることが重要です。

九電グループは、「電源の低・脱炭素化」と「電化の推進」に挑戦し続け、エネルギー需給両面の目標の達成を目指します。

■ 2030年の経営目標 (環境目標)

供給側 サプライチェーン^(※)GHG排出量を
60%削減 (2013年度比)
国内事業は65%削減 (2013年度比)

需要側 九州の電化率向上に貢献
(家庭部門:70%・業務部門:60%)



(※) 原材料調達から、製造、輸送、保守・運用、廃棄までの一連の流れのこと

Q 地球温暖化が進むとどんな影響があるの？

近年、豪雨災害や熱波、海面上昇、干ばつなど、「異常気象」と呼ばれる現象が世界各地で頻発しています。九州でも、毎年のように記録的な豪雨災害が発生しており、多くの被害が発生しています。この異常気象の原因は、「地球温暖化」の影響ではないかと考えられています。



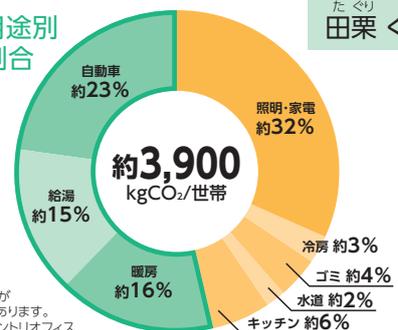
九州電力(株) 地域共生本部 環境計画グループ たくり 田栗 くるみ

Q CO₂排出量を削減するために、エネルギーを使う人にはどんなことができるの？

家庭から出るCO₂の約半分は、主に石油・ガスを使用する自動車、暖房、給湯からです。

電気は、使用時にCO₂を排出しないエネルギーです。例えば、電気自動車、エアコン (暖房)、エコキュート (給湯) など電気を活用すれば、CO₂削減につながります。

■ 家庭からの用途別 CO₂排出量割合 (2020年度)



※四捨五入の関係で、合計が100%にならないことがあります。出典: 温室効果ガスインベントリオフィス

再生可能エネルギーの主力電源化

■グループ一体となった再生可能エネルギーの開発

強みである地熱発電や水力発電に加え、洋上風力やバイオマス発電等の開発を推進し、2030年に開発量を500万kWとする目標を掲げています。(2021年度末現在:255万kW)



木質バイオマス専焼として国内最大級の下関バイオマス発電所(山口県)

■再生可能エネルギーの最大限の活用

太陽光や風力などの再エネは天候により出力が変動しますが、火力や蓄電池などを用いて的確に対応し、最大限活用しています。



国内最大級の大容量蓄電システムを備えた豊前蓄電池変電所(福岡県)

原子力の最大限の活用

発電所の安全性確保を大前提として、発電時にCO₂を排出しない原子力発電を最大限活用していきます。



CO₂排出抑制に貢献する川内原子力発電所(鹿児島県)

火力発電の低炭素化と新技術検討

出力調整に優れ、再エネの導入拡大や電力の安定供給に貢献する火力発電の効率化に取り組んでいます。また、燃焼時にCO₂が発生しない水素・アンモニア等の発電用燃料への活用や、CO₂回収技術の適用検討など、技術開発に取り組みます。



高効率のコンバインドサイクル発電方式を採用した新大分発電所(大分県)

電化の推進

■九州の電化率向上への貢献

九電グループは、電化のポテンシャルが大きい九州を中心に最大限の電化に挑戦します。

家庭部門	高効率給湯器であるエコキュートやIHクッキングヒーターを中心としたオール電化の推進
業務部門	設備の運用状況やエネルギーの使用状況に基づいた個別提案の強化(エネルギー効率が高いヒートポンプシステム等)

産業部門	ヒートポンプ等熱源転換機器の技術研究、生産工程における幅広い温度帯の電化提案
運輸部門	社有車の100%EV化 ^(※) ・EVを活用した新たなビジネスモデルの検討(2022年度から集合住宅向けEV充電サービス「PRIEV(プライブ)」開始)

(※)特殊車両を除く

■地域のカーボンニュートラルの推進

九電グループのトータルソリューションの提供(太陽光等の再エネ設備導入等)により、自治体等のカーボンニュートラル推進を支援します。

第30回地球環境大賞において「経済産業大臣賞」を受賞

2022年3月、九電グループは第30回地球環境大賞(フジサンケイグループ主催)において、第27回に続き2度目となる「経済産業大臣賞」を受賞しました。「再エネの積極的な開発・受け入れ」や「EVの活用・普及促進」、地域との協働で行う環境保全活動による「生物多様性の保全」等、幅広い活動実績が高く評価されたものです。

授賞式にて表彰状を受け取る瓜生会長
(秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席)
※産経新聞社撮影

